

Title	「から」と「ので」の構文的機能の相異につい
Author(s)	重見, 一行
Citation	語文. 1996, 65, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「から」と「ので」の構文的機能の相異について

「接続助詞」とは

から論を始めようと思う。

現代語の「から」と「ので」は、普通共に接続助詞として議論されている。しかし、接続助詞とはどういうものか、また格助詞とどれている。しかし、接続助詞とはどういうものか、また格助詞とどれている。しかし、接続助詞とはどういうものか、また格助詞とどれている。しから」と「ので」は、普通共に接続助詞として議論さ

る)。

に、「文」に相当するものである(今は述体句の場合のみを 考 えれば、「文」に相当するものである(今は述体句の場合のみを 考 えた(山田帆p)。山田氏の言う「句」とは、それが単独で実用 さ れに 出田孝雄氏は、接続助詞を「句と句とを結び合するもの」と言っ 山田孝雄氏は、接続助詞を「句と句とを結び合するもの」と言っ

イ以下、所謂「順接」の場合のみを問題とする)。 しかし、このような山田氏の定義には多少補足すべき 事 が ある

件接続の相異である。 本論として問題にすべき事の一つは、所謂仮定条件接続と確定条

論していない。しかし、「接続」の意義を考える点からは重要 で あ山田氏は、これについて、接続助詞の資格の問題としては深く議

件接続の述語は、真の述語とは言い難いと思われるのである。それ述語に相当するものと考えられるからである。逆に言えば、仮定条は、この確定条件接続の場合の上接文言の述語こそ、真に「文」の場合こそ、助詞は真の接続機能を発揮していると考える。と言うの筆者は、確定条件の場合こそ、真に「接続」の関係であり、この筆者は、確定条件の場合こそ、真に「接続」の関係であり、この

、宣見しましたまで、これでリントー。 定するものである。かかる点はすでに幾度か論じて来た事であるが文全体の情報内容の、この世界での存在の時間的空間的あり方を限ければならない。筆者の理解によれば、述語は文末にあって、その では、真の述語とはどういう事であろうか。

それには、まず述語の、文(句)にはたす役割の理解から述べな

(重見a第一章第二節等)、一応要約しよう。

まず、情報の時間的空間的あり方を限定するとはどういう事かと

⑴きれいな花が咲いた。言うと、例えば、

「咲いた」と「散った」を比較してみると、「咲く」という時 空 のは、物事のこの世界での存在のあり方を表現している。その場合、的に述語となる動詞(形容詞等に関する理解は重見b第二章参照)の世界の存在を表現するものと考えられるが、このように、基本と言う時、これは「きれいな花」の「咲いた」というあり方での、

通している。山田氏はこの点について、前者を各の述語の「属性」 占め方と、「散る」という時空の占め方は異る。しかし、ある事物 の相異と考え、後者を各の述語の「陳述」の共通として 理 解 し た のこの世界での「時間的空間的存在を指定する」機能そのものは共

この世界での時空的定位を行うものだ、と言って来たのである。 (山田郡中)。 次に、接続助詞の問題に直接する述語の問題を考えてみよう。例 およそ右のような理解において、筆者は、述語はある情報内容の

②a昨日学校に行った。

b昨日学校に行った気配はない。

学校に行った」という情報が事実この世界に存在した、という事を の右の二つの「行った」という表現を比較してみると、aは「昨日 表現していて、全体の情報内容の、この世界の現実の存在を確定し

なく、発話中の一つの話柄として取り上げているにすぎない表現だ、 行った」事自体は存在の情報であるともないとも言っているのでは 表現だ、という事になる。換言すれば、この表現は、「昨日学 校 に まり「昨日学校に行った」が存在の情報としては確定されていない ない」という叙述があるように、「事実」として行ったかどうか、つ

③昨日学校に行った事が判明した。

という事になる。例えば、

現内容全体の中で結果として存在の情報であり得ているにすぎない

と名付けた。それに対して、bの「行った」は、この後に「気配は のような場合は、下に続く叙述によって、表現としてではなく、表 ているのである。このような述語を持つ情報を筆者は「存在の情報」 うなものを筆者は「事柄の情報」と名付けた。 てみよう。 としたのである。 情報のまとまりが「存在の情報」である事を表現している場合だ、 れた上下接文言の情報の性格を、確定条件と仮定条件において考え 二つの別々の「文」として独立させて表現しても、実質的な表現意 接続だと言えるのである。そしてこのような場合は、上下接情報を である。従って、真に「句と句とを結び合する」場合は、確定条件 を有する場合は、その述語によって存在の情報を表現しているはず 在の情報」と言える。 語に括られた情報は、 この世界の事実を述べたものとしての、「存 は「事柄の情報」である。これに対して、bの「行った」という述 表現の外形は述語をもった一つの独立した情報であるが、実質的に の情報であり得るための、前提条件の情報である。その意味では、 在の情報」ではない。この上接の情報は、いわば下接の情報が存在 という仮定であるから、事実行ったというのではない。つまり「存 さて、このような述語に対する観点から、所謂接続助詞で結合さ 以上のように考えて、筆者は、真の述語とはその述語で括られた 右のaの「行った」を考えてみると、これは「行ったとしたら」 以上のように考えると、山田氏の言う「句」が真に「文」の資格 4)a昨日学校に行ったなら彼に会えたろう。 b昨日学校に行ったので彼に会えたろう。

義にほぼ変りがないと言えるのである。次のように、 (4)b°昨日学校に行った。彼に会えたろう。

のである。このような、単に発話中の一つの成分情報でしかないよ

表現の仕方であり、(上)→(下)のように図示し得る表現関係と言え在の情報を伝え、次に時間をおいて別の存在の情報を送る、というこのような確定条件接続による情報伝達の仕方は、まず一つの存

るのである。

価値を生ずるものである。つまり (上) → (下) のように図示出来るように、実質的には上下接文言一体で、一つの存在の情報としてのとして独立させて表現するならば、先の似りと同じになって、元のとして独立させて表現するならば、先の似りと同じになって、元のこれに対して仮定条件接続の場合を考えてみると、もし二つの文

続助詞の基本的な「接続」意義そのものは変らないと考えられる。ただし、「仮定」と「確定」は上接情報の内容的相異であって、接

ようなものである。

二「修飾」と「接続

⑸なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそえ聞え出でね。狭義係助詞が接続助詞に下接したような場合である。 さて、山田氏の定義で問題になる二つめは、古語の場合の、所謂

(岩波古典大系源氏五48p)

しても、基本的には意味が変らないと考えられる。例えば、続であるから、上下接文言を二つの別々の文として独立させて表現申しあげる事が出来ません」という意味になる。これは確定条件接申しあげる事が出来ません」という意味になる。これは確定条件接まず、このような係助詞の下接していない場合を考えてみよう。まず、このような係助詞の下接していない場合を考えてみよう。

⑤なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍り。(されば)え 聞 え

出です

ていると考えられる。のような、時間的前後をもった別々の情報の伝達という表現となっのような、時間的前後をもった別々の情報の伝達という表現となって、上下接文言の情報は共に存在の情報として、(上)→(下)

にしているのである。従って、(5)の浮舟の応答も、その下接文言は去の事で、尼は、そのすでに確定した「拒否」の事実を詰問の根拠は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すなわち、ここは、身投は、次のような文脈上にあるからである。すると、この場合の上下接文言の情報内をの事で、尼は、そのすでに確定した「拒否」の事実を詰問の根拠去の事で、尼は、そのすでに確定した「拒否」の事実を詰問の表すにある。

関係でないばかりでなく、先の仮定条件接続とも異なり、上下接文で、上接文言にその旧情報としての結果内容を、上接文言の関係は、15℃おけるような、真の「接続」で、上接文言にその旧情報としての結果内容を、上接文言の理由提示の新情報内容で限定し補足する事によって、「因果命題」という、全体としての一つの発話意義を生じている関係と言えるのである。の一つの発話意義を生じている関係と言えるのである。の一つの発話意義を生じている関係と言えるのである。としての発話意義を失っている事を承知に情報で、独立した「文」としての発話意義を失っている事を承知

と、全体としての情報価値を生ずる事になる点で、例えば、に、全体としての情報価値を生ずる事になる点で、例えば、言の関係は、上接文言が下接文言の内容を「限定・補足」するが故

(6)昨日学校に行った故に彼に会えた。

(上) + (下))のような関係である。の関係も、「修飾」関係の一種と言えるので ある。図 示 す れ ば、の関係もが「連用修飾」の関係と見られるように、⑸の上下接文言

田孝雄氏の言う(山田™P)「接続格」、いわば「原因理由格」的表の思関係」という内容関係を指示するだけの、一種の格助詞、山解で言えば、その上接文言「卓立」の機能によって、本来の「接解で言えば、その上接文言「卓立」の機能によって、本来の「接解に論じたように(重見c)、下接した「こそ」係助詞の、従来の理解にさせられて、ただ「~だから~だ」と言った、上下接文言の接能をはたしている事になるのであろうか。この点については、なる機能をはたしている事になるのであろうか。この点については、なる機能をはたしている事になるのであろうか。この点については、なる機能をはたしている事になるのであろうか。この点については、なる機能をはたいる事になるのである。

る事を知るのである(以下重見a第二章第四節参照)。と、所謂「接続助詞」と言われるものが、二種類の機能を有していき、所謂「接続助詞」と言われるものが、二種類の機能を有していきして理解されるべき、「修飾」的関係を発現している場合もあるとして理解されるべき、「修飾」的関係を発現している場合もあるをして理解される事を否定する、同時一体的な一つの情報の所謂確定条件接続の助詞も、実質的には、上下接文言が時間的順る所謂確定条件接続の助詞も、実質的には、上下接文言が時間的順

示機能のみを発現する事になっている、と言えるのである。

構造となり)、「因果関係」という情報内容表示機能のみを発現して詞の下接によって停止させられ(その方は「こそ」が担って「修飾」本来有している、「接続」という情報構造形成機能を、「こそ」係助機能」と 名付けた。⑸例のような場合は、「ば」が 接続助詞として伝達する事を表出する機能である。筆者はこれを「情報構造形成統」機能としての、実質的に二つの別々の情報を時間的順序をもっ

三 「から」と「ので」

いるのである。

さて、いよいよ筆者の「から」と「ので」に対する理解を提供する事になるが、後でも述べるような、今日の言葉の性格の変化過程、お事になるが、後でも述べるような、今日の言葉の性格の変化過程、相当困難なように思われる。この点で筆者は、すでに多くの先は、相当困難なように思われる。この点で筆者は、すでに多くの先を取り上げて、そこからの理解を述べる事にしたい。その点での諸賢の御批判は甘受せざるを得ないと考える。その特性というのは、「~のだ(のである)」文中では、「から」を取り上げて、そこからの理解を述べる事にしたい。そのに、一つに対する理解を提供する事になるが、後でも述べるような。

次の1~4は各どちらの言い方が自然でしょうか。

1 {b彼が来たので出かけたんだ。

2 [a町はずれなのでこんなに静かなんだ。

的関係を 表示する 機能であり、筆者は これを「情報内容 表示機能

すなわち、一つは「因果関係表示」と言った、上下接文言の内容

(論理的意味関係表示機能)」と名付けた。 もう一方は、

真の「接

3 (a苦しいからカバンをおろした。 「a昨日は日曜だったからゆっくり休んだ。 し苦しいのでカバンをおろした。

なく、波線部の叙述の形式的述語であり、全体で、一つの「事柄の情

b昨日は日曜だったのでゆっくり休んだ。

_	_	_		
計	高女大生	高知大生		
45	28	17	а	,
12	7	5	Ъ	1
44	24	20	а	2
13	11	2	b	
18	9	9	а	9
39	26	13	b	3
15	10	5	а	_
42	25	17	b	4

どのような「から」と「ので」の性格の相異を表明していると考え られるのであろうか。 それでは、このような「のだ」文中での使用の自然と不自然とが、

この点を考えるにおいては、まず「のだ」文の性格を考えておく

8風邪をひいたから学校を休んだんだ。

詞述語文を形成するという点である。このように言われる「名詞句」 を考えてみると、例えば、 め、一種の名詞句とし、それに「だ」が下接するという、一種の名 者も論じて来た(重見a第一章第三節・c)。その間の見解の ほ ぼ 必要がある。この点についても、すでに先学の多くの論があり、筆 一致する所は、「のだ」文は、その上接叙述を「の」によって ま と

あるが)わけは、この場合の「行った」は①全体としての述語では の波線部が名詞句と言われる(正確には「の」を含むと言らべきで (7)きのう学校に行ったんだ。

> 足する、所謂「修飾」の関係と理解しなければならないのである。 係ではなく、例えば「きのう」が「学校に行った」の内容を限定補 ならない。このような名詞句内の成分関係は、従って「接続」の関 る場合とは、基本的に構文意義を異にするものだ、と言わなければ 情報→より後の情報」という、時間的前後性の理解を聞手に要求す 報」として受信する事を聞手に要求するものである。このような場 次に「学校に」と発言する、言語における時間的線条性の制約にも ているのであって、現実の発話における、まず「きのう」と発言し、 成分は、それ等が統合して同時一体的に一つの事柄の情報を形成し てみると、これを構成する、「きのう」「学校に」「行った」という各 報」を表出しているからである。このような名詞句を一般的に考え 合の各成分の関係は、先の真の「接続」関係の場合の、「より 前 の かかわらず、これを理解するに当っては、同時一体的な「一つの情 このように考えると、例えば、

うな場合の「から」は、「接続」ではなく、「**修飾**」という情報構造 な情報意義を形成していると考えられるのである。従って、このよ 事によって、全体としての「因果関係命題」において、同時一体的 内容が、下接文言の「果」の内容を補足限定、つまり「修飾」する まり、この場合の上下接文言の関係は、上接文言の「因」の表現的 理解すべき「修飾」の関係だ、と考えられる事になるのである。つ 下接文言の関係は、全体としてまとまった、同時一体的情報として 全体としての一つの名詞句になっているという事は、「か ら」の 上 のように、「から」で結合された上下接文言が、「のだ」によって、

形成機能を発現している。という事になるのである。

けである。つまり、「ので」は「修飾」関係を構成しにくいの で あ り、基本的には「接続」関係に使用される、と言う事である。 「ので」が「のだ」文中に用いられにくい理由が推測されて来るわ 以上のような「から」の性格の理論的帰結よりする時、逆に、

しないような構文を「ので」が担当している、と考えられるのであ 助詞の下接したような構文を「から」が担当し、⑤の係助詞の下接 接続助詞的だ、という事である。先の古語の⑤例で言えば、⑤の係 る。端的に言えば、「から」はより格助詞的であり、「ので」はより 続」という情報構造形成機能を発現するのだ、と考えられるのであ ある。これに対して「ので」は、基本的には接続助詞と し て、「接 あり、基本的には「修飾」という情報構造形成機能を発現するので 述の接続格・原因理由格と言うべき格助詞に近い性格を有するので しては、「因果関係」を表示するものであるが、「から」の方は、先 改めて 言えば、「から」も「ので」も、 共に 情報内容表示機能と

理由提示の部分が新情報の意義を有するような場合は「修飾」構造 から、「から」が用いられながら「のだ」文でない場合は、落着 か このような情報構造は「のだ」文として表現されるのが普通である であり、その場合は「から」が用いられるという事になる。同時に ない表現になりやすい、と言う事になる。例えば尾方理恵氏が、 このように考えると、下接文言が旧情報扱いで、上接文言の原因 9年日私は風邪だったから学校を休んだ。

という留学生の言い方は誤用と考え、 (9)昨日私は風邪だったから学校を休んだの (のだ)。

このような「から」と「ので」の相異を、更に尾方氏の論の問題

て、『昨日来なかったね』と話しかけた状況が想定される」と言う を正常な表現とし、その場合は「昨日欠席した事を相手が知ってい (尾方級P) ごとくである。 また、このような「から」と「ので」の相異は、 先学の指摘する

次のような点でも確認出来よう。 一つは、「からだ(からである)」という言い方は普通であるが、

「のでだ」という言い方は普通ではない、と言われる点である。「の するのが、発話の経済と思われるのである。 ら」のように)、と 思われるのである。発話意義のない情報は 省略 場合は、下接文言は省略しても発話意義を失わないから(この「か する故に、下接文言に旧情報を入れる事が出来るからであり、その は既述のように、「から」が「のだ」文中で「修飾」の関係を 形 成 の独立性が強い」(永野8p)と理解する。 しかし筆者に は、こ れ 現が多い事について、例えば永野賢氏は、「から」が「条件とし て 表現、つまり原因理由部分のみを表現して、結果部分を省略する表 で」が「だ」に連結しにくい理由は他にも考えられるが、「からだ」

い方はないという事が指摘されている。これも、「こそ」が今日「と 飾的因果表現を分担する事になった「から」の方と併用される事に 創出するのであり、今日、接続的因果表現の「ので」に対して、修 ⑸で論じたように、このような「こそ」は強制的に「修飾」関係を の係助詞性を残していると考えれば当然と思われる。何故なら、例 りたて詞」と言われるように、多少にても古代の上接文言「卓立」 なったのは自然と思われるからである。 また、「からこそ」という言い方はあるが、「のでこそ」という言

点を指摘する形で明らかにしてみよう。

b鯨は胎生だから魚ではない。 似a鯨はひれを持つから魚である。

文言共に焦点=新情報であるような答え方をするのであれば、共に焦点であると言わなければならないであろう。そして、上下接

b鯨は胎生なので魚ではない。 のゴ鯨はひれを持つので魚である。

される事になると思われるのである。 である。このような表現であれば、上下接文言の方が焦点情報と解報」と聞手に理解される事になり、それを同時的に聞手が理解するならば、「より前の情報→より後の情報=より旧い情報→より新しい 情である。このような表現であれば、上下接文言は「接続」関係としのように、「ので」で解答されるのが自然ではないかと思われる ののように、「ので」で解答されるのが自然ではないかと思われる ののように、「ので」で解答されるのが自然ではないかと思われる の

「修飾」関係としての「から」表現

P)で考えてみよう。 を文言が焦点らしく思われる場合もある。尾方氏の引用例(尾方窓接文言が焦点らしく思われる場合もある。尾方氏の言うように、下文等でない、単独の「から」使用文には、尾方氏の言うように、下上接文言が焦点になる事を述べて来た。しかし、応答的な「のだ」上表で筆者は、「から」は修飾関係を形成する故に、普通に はこれまで筆者は、「から」は修飾関係を形成する故に、普通に は

凹aずっとマイペースでやって来ましたからこれからも続けて

bかわいそうだから助けてあげるね。

b'かわいそうなので助けてあげるね。 ´´´´ロ'、」と〜来ましたので〜でしょう。 ´´´ロ'をしている可能性もある。また、このような場合、との集の表現が会話的であり、その場合、文章表現の場合より変

問に一度で答えた事になると言うのであれば、それは上下接文言が

校に行った」の場合は修飾関係を形成していると見られるが、「学校 容表示機能が本務であって、「修飾」という情報構造形成機能 は 兼 係助詞は情報構造形成機能を本務とするに対して、格助詞は情報内 必ずしも焦点を明確に判定し得ない事に注意すべきなのである。と 照)。しかし、60のような問に対する答としての発話の場合は、焦点 点)になるのが普通である(重見a第一章第一節注21、c4p等参 その場合は、比較的には上接の修飾部分の方が発話意義の中心(焦 接文言を「修飾」する情報構造を形成するのが普通である。そして 格を有しているとするならば、それは既述のように、上接文言が下 務であり、結果的な機能とも言えるものだからである。例えば「学 言うのも、別稿で論じたように(重見a第一章第三節 等)、一般 に 性は明確に認定出来るが、独立的発話としての凹のような場合は、 にモダリティ性の強い表現のある場合は、修飾関係らしい上接文言 る(重見a第一章第三節)。従って、 接続関係になっている(所謂「題述」乃至「対比」の表現)のであ つまり、「から」が「原因理由格」と言った、より格助詞的な 性 10のように、下接文言の末尾

を指摘した(久野27p)。 人野暲氏は、「が」に「総記」と「中立叙述」の二つの意味 機 能

【太郎が学生です。

を「が」について指摘しておこう。

の焦点性は認定出来なくなるのである。このような格助詞の問題点

のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」について 久野氏は、「今年 離ですか」という問が連想されるのであり、「のだ」文 中の「から」表現の立場と同じだと言える。これに対して、のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」について 久野氏は、「今話題に なっている人物の中のような「が」にいて、大郎が来ました。

おける、「が」の33例に相当するような場合も、そのように理解すれば、「が」に「総記」と「中立叙述」と名付けた。つまり、このような場合の下接文言は、旧情立叙述」と名付けた。つまり、このような場合は、むしろ下接文言に情報のしているわけである。このような場合は、むしろ下接文言に情報のしているわけである。このような場合は、むしろ下接文言に情報のしているわけである。このような場合は、むしろ下接文言に情報のしていあるように理解されるのも、無理からぬ事と言える。しかし、各助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格助詞の「修飾」構造形成機能が、結果的なものであるが故に、文格地が、大のように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのように理解するような場合も、そのような場合も、そのような場合も、そのような場合も、そのような場合も、そのような場合も、そのような場合も、そのような場合も、というないる。

「接続」関係としての「ので」表現

る事が出来るものと思われるのである。

のとして語る」のであり、「『因』と『果』との間にどちらかが主で上下接文言は「二つの事態を並列に、ゆるやかに因果関係をもつも上接文言をまとめて、一旦「陳述」するような形態を有するが故に、尾方理恵氏は、「ので」を「のだ」と同じ出自と考え、「ので」が

「文」に分離し得るような情報を、情報内容的関係をつけながら、確かに接続関係は、最初に述べたように、基本的に は、別々 のどちらが従という落差がつくことはない」と言う(尾方邸p)。

されるのも誤りではない。

時間の順序をもって伝達してゆく表現であるから、右のように理解

言うのは、そういう聞手の理解を代弁したものと考えられるのであるのである。普通接続助詞的なものによる上接文言を「従属」節とである。従ってそれは、上下接文言を同時的に理解しようとすれば、「より価値のない情報+より価値のある情報」という理解になり、「より価値のない情報+より価値のある情報」という理解になり、「より価値のない情報+より価値のある情報」という理解になり、「より価値のない情報+より価値のある情報」という理解になり、しかし、先にも述べたように、「接続」の関係は、その上下接のしかし、先にも述べたように、「接続」の関係は、その上下接の

を思われるのである。 ないとも言える。そこに尾方氏の先のような理解も生れて来るものないとも言える。そこに尾方氏の先のような理解も生れて来るものが自然と感覚させる相対的なものであるから、文法的構造とは言え と思われるのである。

五 南理論と三上理論の問題

階に属する語であり、「から」はそれより外側の表出段階の成 分 だ言う事になる。つまり、南氏の結論よりすれば、「ので」は判 断 段的構文論(南a)としての、「から」と「ので」の理解とは逆だ、と続助詞的である、という筆者の理解からすれば、南不二男氏の重層は上のように、「から」がより格助詞的であり、「ので」がより接

た言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞と言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞が、どのような「は」を「提示」とするかは軽々には言えないと思いが、どのような「から」がより接続助詞的だ、と言う事になる。つまり、「から」がよりな話論には少しく疑問が生ずる。まず②である。しかし、このような結論には少しく疑問が生ずる。まず③である。しかし、このような結論には少しく疑問が生ずる。まず③である。つまり、「から」がより接続助詞的だ、と言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞と言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞と言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞と言う事になる(南a14p)。言い換えれば、「ので」がより格助詞と言う事になる(南a14p)。

のような表現は、格別不自然とも思われないのである。また⑥につせた。
はその象は鼻が長かった⑦で土地の人は高い所の木の実を取ら

いて考えてみると、

「たぶん」のような場合でも、のような例を氏自身掲げるように、陳述副詞の種類によるのである。のような例を氏自身掲げるように、陳述副詞の種類によるのである。

ま、「いまり、格別不自然とは思われない。不自然と思われるののような場合は、格別不自然とは思われない。不自然と思われるののような場合は、格別不自然とは思われなるよ。

で、これを上接し得る「から」の方がより接続助詞的であると考え強い助動詞と考えられ、今日ほぼ文末にしか用いられないという点の根拠として有効なのは⑥の場合だけだ、と考えられるのである。のように、所謂推量系の助動詞が対応した時である。従って、南説のように、所謂推量系の助動詞が対応した時である。従って、南説のたぶん彼も来るだろうので~。

むを」のように格助詞や、「行かめども」のように逆接確定条件のの祖語に相当する「む(らむ・けむ)」は、「行かむに」とか「行か らぬ事でもあろうが、古代の順接確定条件の「ば」接続助詞と同じ た「から」と「ので」の歴史的変容過程に照して理解しなければな 事象ではない、と言うべき事のように思われる。この点は一方でま ばこの世界に「確定」した存在の情報を上接するが故と思われるの らではなく、「順接確定条件」を提示する接続助詞性、言い換 え れ やはり「確定」していないと言う事である。つまり、「ので」の上 ば、「ので」 の上にこのような助動詞を含む述語が来る事は不 都 合 ば「(未然の) 蓋然的情報」として、「存在の情報」であり、事実の ある。確かに「う・よう・だろう」も、本来の意味は上 接 動 詞 の らない。すなわち、「ので」の「順接確定条件接続」という性 格 で ならないようである。しかし、これには次の点を指摘しなければな る事は、これまでの筆者の接続助詞論に照しても肯定されなければ 事はないのである。このように考えると、南氏の「から」と「ので」 接続助詞には上接するが、「行かめば」のように、「ば」に上接する 事情としても解釈出来るのである。つまり、今日の「う・だろう」 である。それは情報内容的に来にくいという事であって、文法的な にこれ等の助動詞が来にくいのは、「ので」が接続助詞的でない か ではないはず、と言う事になろう。しかし一方では、「不確定」とは 情報表現で あり得る わけで あるから、筆者の「ので」理解で 言え 意味を有するとした筆者の助動詞論(重見d等)よりすれば、いわ に関する帰納的結論は、必ずしも正当と言えないように思われるの 「不確定性」乃至「蓋然性」を表現するものとして、一種の客体的

> が終止形接続と断定出来るかどうか、という点である。例えば筆者 詞性を判断する事自体に筆者は疑問を有する。その一点は、「から」 ている(三上186p)。しかし、このような上接語の活用形で接 続 助 氏は、終止形に下接するものだけを真の接続助詞に認定すると言っ が連体形であるに対し、「から」のそれは終止形だと言う事である。 ある。氏が右のように考える論拠の一つは、「ので」の上接活 用 語 氏の「から」と「ので」の理解も筆者とは逆という事になるわけで あり、「硬式」とはより 接続助詞的と言う事で ある。従って、三上 に合わせて言えば、三上氏の「軟式」とはより格助詞的と言う事で は硬式という理解がある(三上87p以下)。つまり、先の筆者の 論 南氏の理解に似たものに、三上章氏の、「ので」は軟式、「から」

形に、また「ば」は未然形か巳然形にしか下接しないのである。 の「とも」は終止形に下接するが、確定条件接続の「ども」は巳然 でないと考える事には賛成出来ない。例えば古代語で仮定条件接続 で」が連体形接続であるとしても、それによって単純に接続助詞的 から変容した事を考えると、予想し得る事である。逆に「ので」で 生に尋ねた所でも、21人中5人が肯定した結果もある。元来格助詞 のように、形容動詞の連体形接続は普通であったと思われるし、学 の生育環境では、 「静かだので」と言う者のある事が報告されてもい る。更 に、「の 凹これは高価なからとても買えない。

は三尾砂氏の調査結果(三尾MP以下)をもとにしたものである。 ティ表現に下接しやすい点のある事である(三上四p 以下)。これ すから」「学校ですから」のように、「です・ます」の丁寧のモダリ 三上氏の主張のもう一つの重要な根拠は、「から」に は「行きま

でにおめにかかりますさうで御座います。(久米正雄 全集10年、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。これ、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。これ、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点で ある。に、「から」は口頭乃至会話語によく用いられるという点である。

しかし、これをもって接続助詞の硬軟を論ずる事にはやはり疑問が

命と健康〉32p)で、そのおつもりでいらっして下さい。(荒井良〈幼 な い生で、そのおつもりでいらっして下さい。(荒井良〈幼 な い生のこれからは0医師と荒井君がお相手をさせていただきますの

六 古代語と現代語の接続助詞の相異

と係助詞の下接と言った、明確な形態性において表現し分けている。と係助詞の下接と言った、明確な形態続、あるいはそのままの使用はば「ば」が思い出されるのみである。勿論「に・を・で」等も思い出されようが、「ば」との間には接続助詞らしさの段差があろう。い出されようが、「ば」との間には接続助詞らしさの段差があろう。い出されようが、「ば」との間には接続助詞らしさの段差があろう。い出されようが、「ば」との間には接続助詞らしさの段差があろう。い出されようが、「ば」との間には接続助詞らしさの段差があろう。い出されようが、「ば」との間には接続助詞のしきの段差がある。の情報造の相異を、未然形接続と已然形接続、あるいはそのまるの見がある。

うに思われる例も多い。

なければならない。

このような古語の状況に照す時、現代の接続的語は相当曖昧と言わ

が明確でないものも多い。 この他「て・と・つつ」等格助詞との区別形的に解する人も多い。この他「て・と・つつ」等格助詞との区別人も多いし、「たら」を接続助詞と認定する人はい な い で あ ろうしての品詞的独立性を認定しにくい。「なら」を接続助詞と見 な いしての品詞的独立性を認定しにくい。「なら」を接続助詞と見 な いしての品詞的独立性を認定しにくい。そればか り か、「接続助詞」と心的な語を限定する事が出事ない。そればか り か、「接続助詞らしい中まず、接続的役割をする表現は多様にあるが、接続助詞らしい中まず、接続的役割をする表現は多様にあるが、接続助詞らしい中

脈によって判断しなければならない語が多い。態的別として認定しにくい。例えば、「仮定」と「確定」の 別を文態的別として認定しにくい。例えば、「仮定」と「確定」の 別を文また、当該の接続語の機能の別を、それ自身あるいは上接語の形

四aよく見たら違いがわかるよ。回aよく見れば五円玉だった。

と頃、凹と凹の関係のように、どちらでも表現意義が相異しないよける方法が十分でない。本稿で問題とした「から」と「ので」の、傾それの「修飾」と「接続」の情報構造の区別を、形態的に表出し分この他「て・と」等々である。更に同じ確定的因果関係表現でも、もよく見たら違いがわかった。

失である。その結果は、接続助詞がそれとして本来有すべき「接続」自身の多様化ではない。それはむしろ接続助詞としての独立性の喪と思われる。まず、接続的表現の多様化は、先述のように接続助詞とのような現代語の状況は、次のように解釈出来るのではないか

の恐恵を受けた。

という情報構造形成機能の喪失である。それを補う方法は、上下接という情報構造形成機能の喪失である。その短別のように思われるのである。その接続的情報構造の割別によって、聞手に結果的に間手が判断してくれるのである。と言うより、ない関係で結果的に聞手が判断してくれるのである。と言うより、なの関係で結果的に聞手が判断してくれるのである。と言うより、容の関係で結果的に聞手が判断してくれるのである。と言うより、容の関係で結果的に聞手が判断してくれるのである。と言うより、容の関係で結果的に関手が判断してくれるのである。と言うより、なのである。と思われるのである。比喩的に言えば、古代の接続表現はなのだ、と思われるのである。比喩的に言えば、古代の接続表現はなのだ、と思われるのである。比喩的に言えば、古代の接続表現はなのだ、と思われるのである。と問題は、上下接という情報構造形成機能の喪失である。それを補う方法は、上下接をという情報構造形成機能の喪失である。それを補う方法は、上下接

(2) 引用文献は次のものである。(1) 山口堯二氏の接続法研究も山田文法に立脚していると理解する。)

尾方理恵「『から』と『ので』の使い分け」〈国語研究〉

(松村明先

だ』文」高知大学教育学部研究報告 9・d「助動詞の『意 味』」富(一九九六年三月刊行予定)・c「『連体なり』文と係結び文と『の重見一行a〈助詞の構文機能研究〉・b〈日本語の文法を考える〉久野暲〈日本文法研究〉

生喜寿記念論文集)

三尾砂〈話しことばの文法〉 益岡隆志「条件表現と文の概念レベル」〈日本語の条件表現〉 永野賢『再説『から』と『ので』とはどう違うか」日本語学7の13山大学教育学部紀要40

南不二男a「現代語の語法三上章〈現代語法序説〉

まく 南不二男a「現代語の語法」〈国文法講座6〉・b〈現代日本語の構

兵庫教育大学教授